

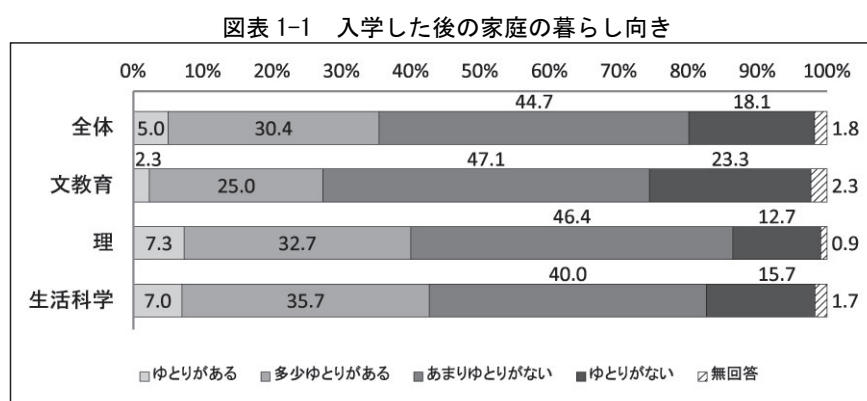
第2章 「新入生の保護者対象調査」の結果報告

(1) 家庭の暮らし向き

本節では、本学新入生の家庭の暮らし向きについて、①大学入学後の家庭の暮らし向き、②家計支持者の職業、③家計支持者の年収、④世帯年収から示していく。

①大学入学後の家庭の暮らし向き

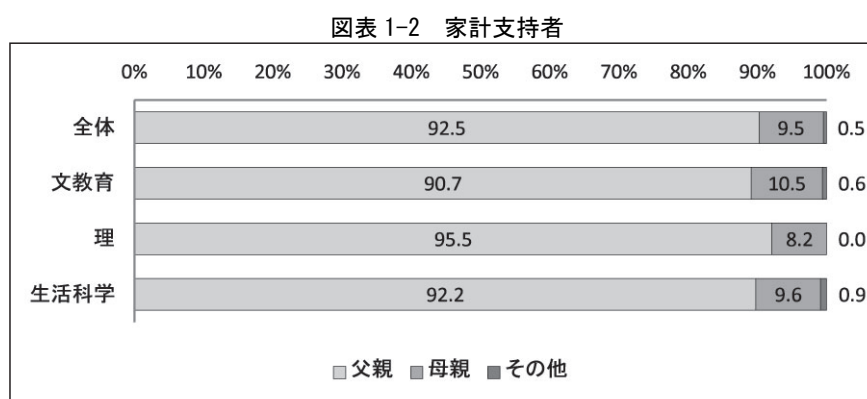
図表 1-1 は、本学新入生が大学に入学した後の家庭の暮らし向きについて、「ゆとりがある」「多少ゆとりがある」「あまりゆとりがない」「ゆとりがない」の4件法で尋ねた結果である。



全体でみると、「あまりゆとりがない」が最も多く、「ゆとりがない」と合わせると全体の6割を超えている。文教育学部は7割を超え、「ゆとりがない」も2割を超えるなど、その傾向が強く示されている。平成23年度新入生でも同様の傾向が示されている（お茶の水女子大学2011b, P35 参照）。

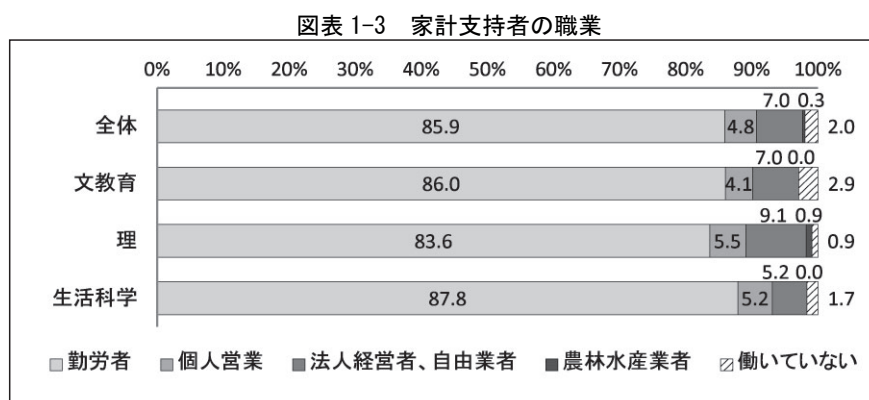
②家計支持者の職業

図表 1-2 は、本学新入生の家計支持者について、「父親」「母親」「その他」別に示した結果である。



本学新入生の家計支持者は、全体の92.5%が「父親」であり、学部別にみてもその傾向に大差はみられない。平成23年度新入生でも、同様の傾向が示されている（お茶の水女子大学2011b, P35 参照）。

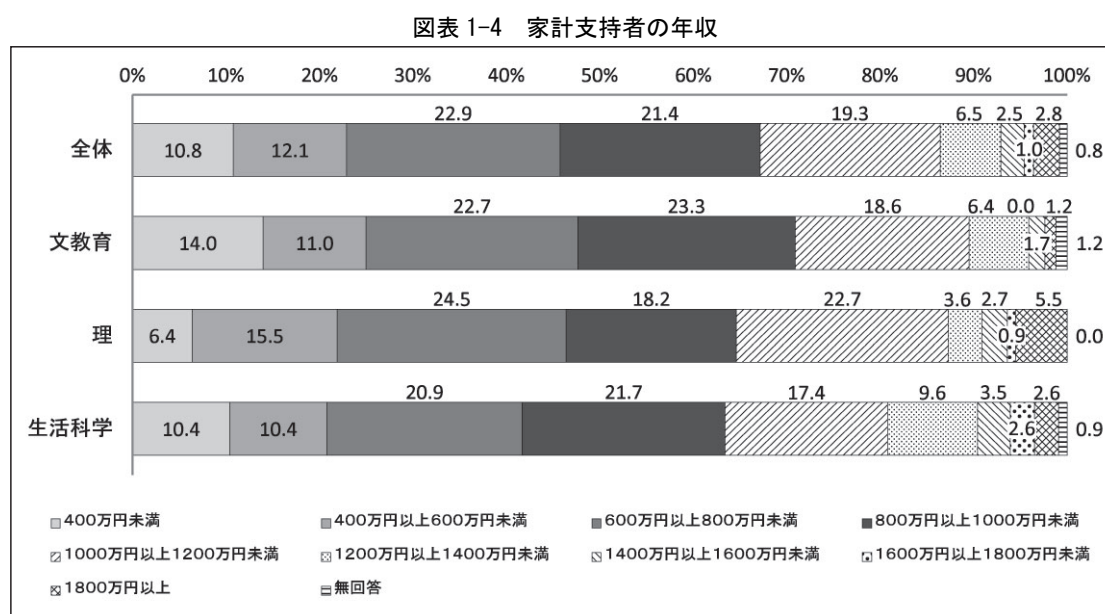
図表 1-3 は、家計支持者の職業について、「勤労者」「個人営業」「法人経営者・自由業者」「農林水産業者」「その他」「働いていない」別に示した結果である。



本学新入生の家計支持者の職業は、全体の 85.9%が「勤労者」であり、学部別にみてもその傾向に大差はみられない。平成 23 年度新入生でも、同様の傾向が示されている（お茶の水女子大学 2011b, P36 参照）。

③家計支持者の年収

図表 1-4 は、本学新入生の家計支持者の年収について、「400 万円未満」「400 万円以上 600 万円未満」「600 万円以上 800 万円未満」「800 万円以上 1000 万円未満」「1000 万円以上 1200 万円未満」「1200 万円以上 1400 万円未満」「1400 万円以上 1600 万円未満」「1600 万円以上 1800 万円未満」「1800 万円以上」の中から尋ねた結果である。



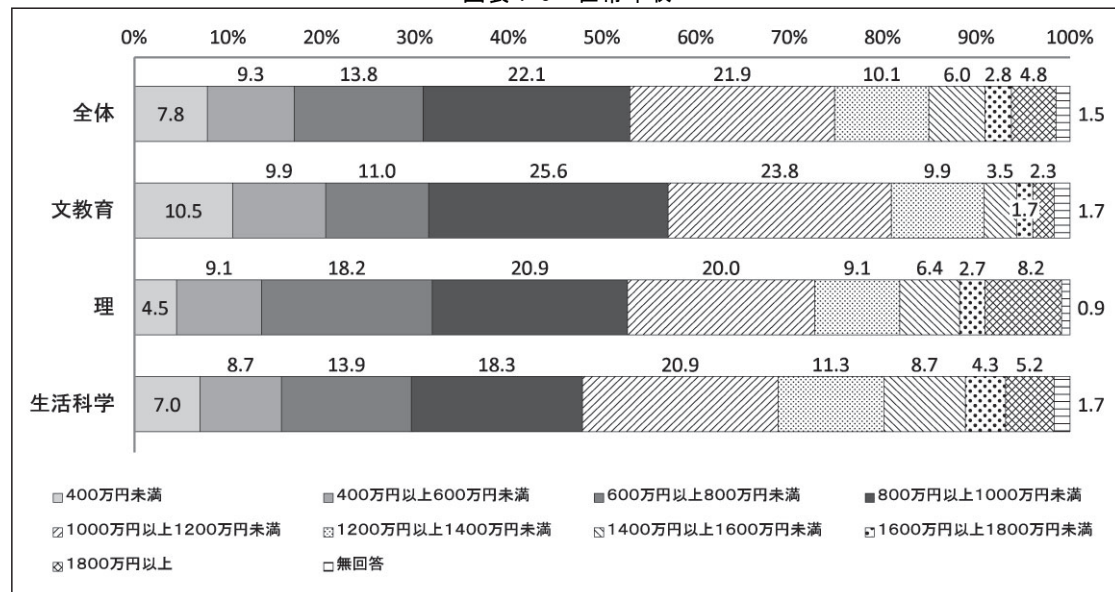
全体でみると、「600 万円以上 800 万円未満」が最も多く、続いて「800 万円以上 1000 万円未満」「1000 万円以上 1200 万円未満」の順であった。平成 23 年度新入生でも、同様の順であり、それぞれ比率もほぼ同様であった（お茶の水女子大学 2011b, P36 参照）。

その一方で「400 万円未満」も 1 割以上みられ、文教育学部では 14.0%に及んでいることが示されている。

④世帯年収

さらに、本学新入生の家庭の世帯年収について、家計支持者同様に尋ねた結果が図表 1-5 である。

図表 1-5 世帯年収



全体でみると、「800 万円以上 1000 万円未満」が最も多く、次いで、「1000 万円以上 1200 万円未満」「600 万円以上 800 万円未満」の順であった。平成 23 年度新入生でも、同様の順であり、それぞれ比率もほぼ同様であった（お茶の水女子大学 2011b, P37 参照）。

その一方で「400 万円未満」が 7.8%みられ、文教育学部ではその比率が 1 割を超えていることが示されている。

日本学生支援機構による「平成 22 年度学生生活調査」によれば、家庭の年間収入別学生数の割合（大学昼間部）は、図表 1-6 のとおりである。

図表 1-6 家庭の年間収入別学生数の割合（大学昼間部）

(単位：％)																		
区分		家 庭 の 年 間 収 入															計	(参考) 平均年間 収入額
		200万円 未 満	200 ～ 300	300 ～ 400	400 ～ 500	500 ～ 600	600 ～ 700	700 ～ 800	800 ～ 900	900 ～ 1,000	1,000 ～ 1,100	1,100 ～ 1,200	1,200 ～ 1,300	1,300 ～ 1,400	1,400 ～ 1,500	1,500 万円 以 上		
男	国 立	4.0	4.6	6.8	9.0	8.5	9.5	15.6	9.7	6.7	9.5	3.4	3.2	2.6	1.0	5.6	100.0	千円 7,950
	公 立	5.0	5.3	8.3	8.6	12.4	11.2	18.5	8.8	5.9	6.5	2.3	1.8	1.4	0.7	3.2	100.0	7,000
	私 立	4.2	4.5	7.4	8.8	10.2	10.1	10.1	17.8	5.9	7.2	3.1	2.7	1.4	0.9	5.8	100.0	7,880
女	国 立	5.3	4.9	6.8	7.7	7.5	10.0	17.0	9.3	6.1	8.3	3.5	3.4	1.8	1.7	6.7	100.0	8,060
	公 立	5.2	5.4	7.5	8.3	10.7	10.7	16.7	10.0	6.9	6.5	2.4	2.7	1.7	1.0	4.4	100.0	7,220
	私 立	4.0	4.4	6.0	7.4	9.2	9.2	10.3	18.5	6.2	8.3	3.7	3.4	1.8	1.0	6.6	100.0	8,140
平均	国 立	4.5	(9.2) 4.7	(16.0) 6.8	(24.5) 8.5	(32.6) 8.1	(42.3) 9.7	(58.5) 16.2	(68.1) 9.6	(74.6) 6.5	(83.7) 9.1	(87.2) 3.5	(90.5) 3.3	(92.8) 2.3	(94.1) 1.3	(100.0) 5.9	100.0	7,990
	公 立	5.1	(10.5) 5.4	(18.4) 7.9	(26.9) 8.5	(38.3) 11.4	(49.2) 10.9	(66.7) 17.5	(76.2) 9.5	(82.6) 6.4	(89.1) 6.5	(91.4) 2.3	(93.7) 2.3	(95.2) 1.5	(96.1) 0.9	(100.0) 3.9	100.0	7,120
	私 立	4.1	(8.5) 4.4	(15.2) 6.7	(23.4) 8.2	(33.1) 9.7	(42.8) 9.7	(53.0) 10.2	(71.1) 18.1	(77.1) 6.0	(84.8) 7.7	(88.2) 3.4	(91.3) 3.1	(92.9) 1.6	(93.9) 1.0	(100.0) 6.1	100.0	8,010
	計	4.2	(8.7) 4.5	(15.5) 6.8	(23.7) 8.2	(33.2) 9.5	(42.9) 9.7	(54.5) 11.6	(70.7) 16.2	(76.8) 6.1	(84.7) 7.9	(88.1) 3.4	(91.2) 3.1	(92.9) 1.7	(93.9) 1.0	(100.0) 6.1	100.0	7,970

(注) () は、家庭の収入階層別学生数の割合の累計を示す。

出所) 日本学生支援機構「平成 22 年度学生生活調査」

家庭の年間平均収入額は、全体でみれば 797 万円、本学の学生が該当する国立大学・女子に限れば 806 万円であり、本学新入生の家庭の世帯年収は、国立大学・女子の年間平均

収入額よりも、さらにいえば、私立大学を含めた全体の年間平均収入額よりも高いことがうかがえる（図表 1-5 参照）。平成 23 年度新入生でも、同様の傾向がみられた（お茶の水女子大学 2011b, P37-38 参照）。

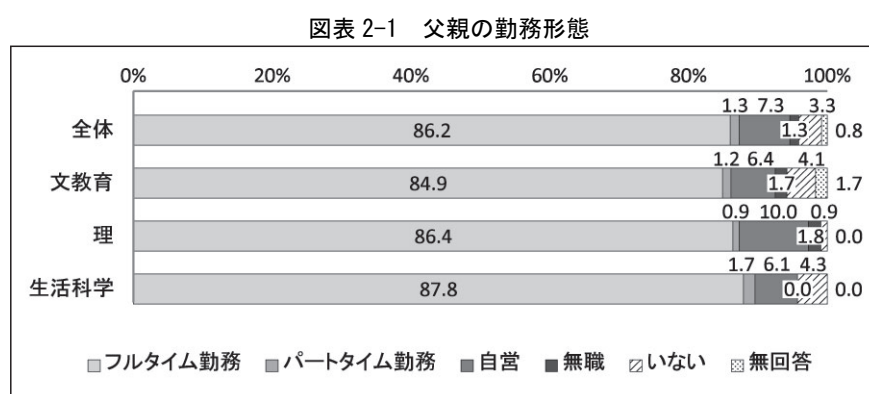
また、図表 1-6 からは、家庭の年間収入が 1000 万円をこえる家庭が、全体の 23.2%、国立大学・女子の 25.4%であるのに対し、図表 1-5 からは、本学新入生の家庭のうち、少なくとも 45.6%が、世帯年収 1000 万円をこえていることが示されており、世帯年収の高い家庭が、全国水準に比べて、本学新入生の家庭には多いことが明らかである。平成 23 年度新入生でも、同様の傾向が示されている（お茶の水女子大学 2011b, P37-38 参照）。

(2) 親の職業・学歴

本節では、本学新入生の親の職業や学歴について、①親の勤務形態、②親の職種、③親の学歴から示していく。

①親の勤務形態

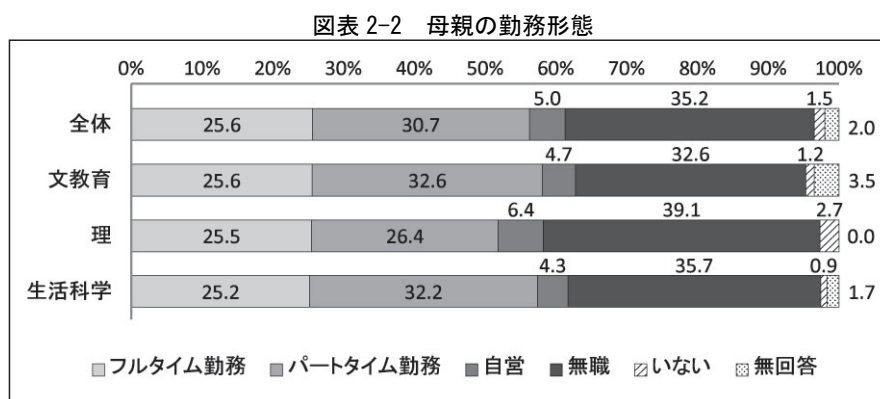
図表 2-1 は、本学新入生の父親の勤務形態について、「フルタイム勤務」「パートタイム勤務」「自営」「無職」「いない」「無回答」別に尋ねた結果である。



本学新入生の父親の勤務形態は、全体のおよそ 9 割が「フルタイム勤務」であり、学部別にみても大きな差異はみられない。

平成 23 年度新入生は、全体のおよそ 8 割が「フルタイム勤務」、理学部では「自営」が 15%を超えるなど、今年度との違いがみられる結果となった（お茶の水女子大学 2011b, P39 参照）。

同様に、本学新入生の母親の勤務形態について尋ねた結果が図表 2-2 である。

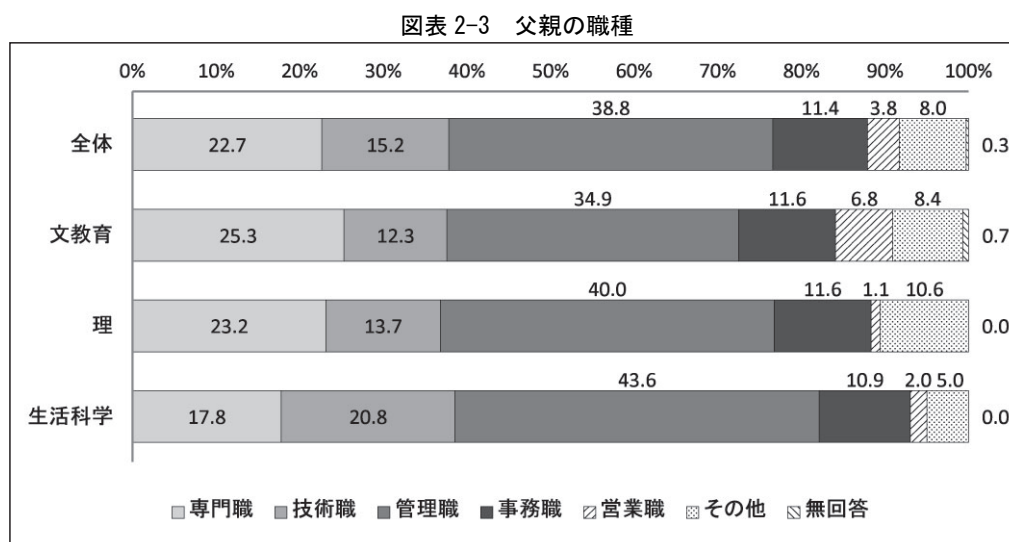


本学新入生の母親の勤務形態は、全体でみると「無職」「パートタイム勤務」「フルタイム勤務」の順だが、いずれの形態もおよそ 3 割程度と大きな差がみられるものではなかった。この結果は、平成 23 年度新入生でも同様にみられたものである（お茶の水女子大学 2011b, P39 参照）。

学部別にみると、他の学部比べて理学部では「パートタイム勤務」がやや低く、「無職」がやや多い傾向もみられる。

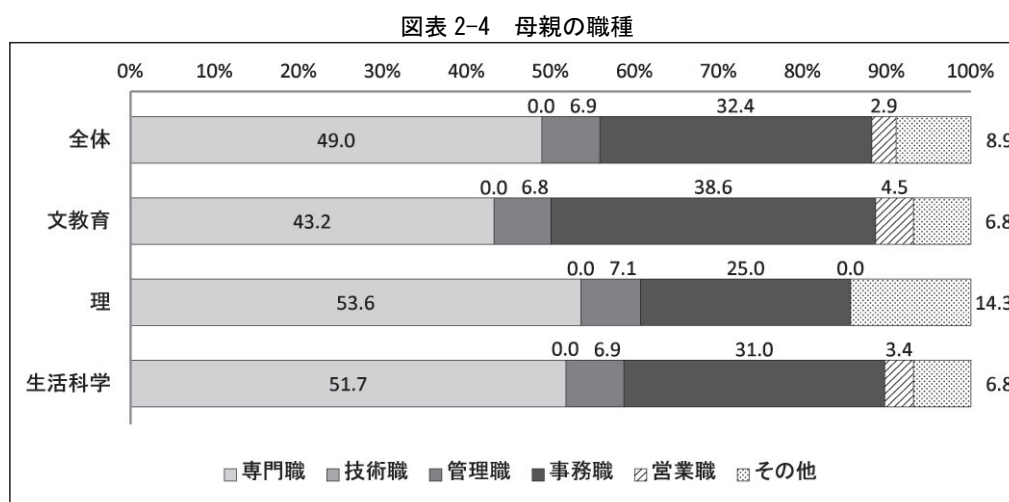
②親の職種

図表 2-3 は、本学新入生の父親の勤務形態について「フルタイム勤務」と回答した者に尋ね、「専門職」「技術職」「管理職」「事務職」「営業職」「その他」別に示した結果である。



本学新入生の父親の職種は、全体で見ると、「管理職」が最も多くおよそ 4 割を占め、続いて「専門職」「技術職」の順で多くみられた。平成 23 年度新入生でも、ほぼ同様の傾向が示されている（お茶の水女子大学 2011b, P39-40 参照）。

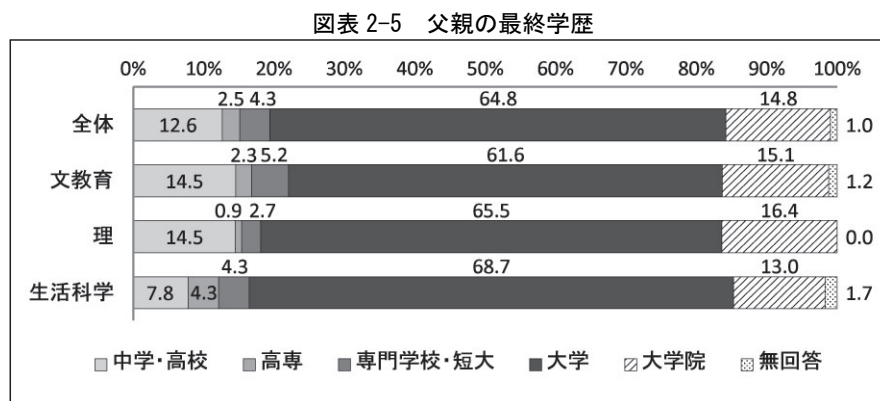
同様に、本学新入生の母親の勤務形態について「フルタイム勤務」と回答した者に尋ねた結果が図表 2-4 である。



本学新入生の母親の職種は、全体で見ると、「専門職」がおよそ半数を占め、続いて「事務職」「管理職」の順で多くみられた。平成 23 年度新入生でも、ほぼ同様の傾向が示されている。ただし、平成 23 年度新入生ほど学部による差異傾向は明らかに示されていない（平成 23 年度新入生では、理学部 29.6%に対して、生活科学部 71.0%（お茶の水女子大学 2011b, P40 参照））。

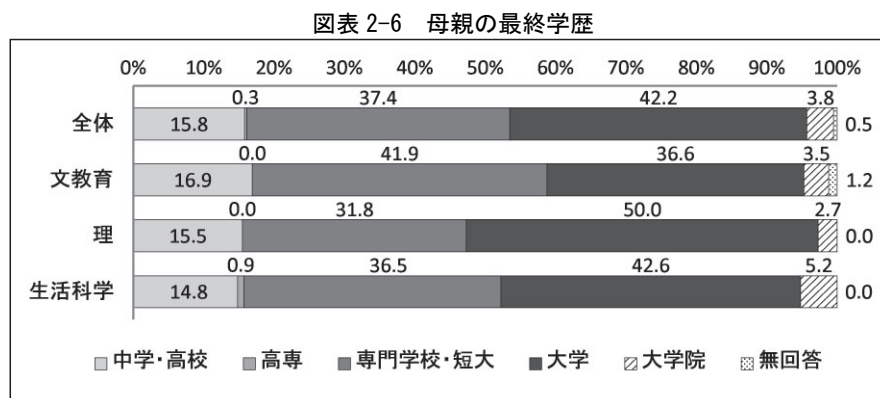
③親の学歴

図表 2-5 は、本学新入生の父親の最終学歴について尋ね、「大学院」「大学」「専門学校・短大」「高等専門学校」「中学・高校」別に示した結果である。



本学新入生の父親の最終学歴は、全体でみると、「大学」が6割を超えて最も多く、「大学院」「中学・高校」の順が続いている。学部別にみても、大きな差異はみられない。平成23年度新入生でも、ほぼ同様の傾向が示されている（お茶の水女子大学2011b, P40-41 参照）。

同様に、本学新入生の母親の最終学歴について尋ねた結果が図表 2-6 である。



本学新入生の母親の最終学歴は、全体でみると、「大学」「専門学校・短大」がそれぞれ4割程度を占め、「中学・高校」が続く結果となっている。平成23年度新入生でも、ほぼ同様の傾向が示されている（お茶の水女子大学2011b, P41 参照）。

ただし23年度新入生では、生活科学部での高学歴傾向が父親・母親ともにみられたが、今年度新入生では、こうした傾向は示されていない（お茶の水女子大学2011b, P41 参照）。

(3) 大学入学後の経済・生活支援

本節では、本学新入生の大学入学後の経済・生活支援について、①奨学金・学費免除等の制度の「利用経験の有無」「認知」「利用希望」、②学生寮に関する「認知」「入寮希望」から示していく。

①奨学金・学費免除等の制度の「利用経験の有無」「認知」「利用希望」

図表 3-1 は、本学に入学予定のご子女が、これまでに受けたことのある奨学金・学費免除等の制度について、複数回答可として尋ねた結果である。

図表 3-1 ご子女がこれまでに受けたことのある奨学金・学費免除等の制度 (%)

	日本学生支援 機構の奨学金	地方公共団体の 奨学金	学校独自の 奨学金	民間奨学団体の 奨学金	新聞社の奨学金	その他の奨学金	学費免除	特待生
全体	1.3	2.5	0.8	0.0	0.0	1.0	1.5	3.3
文教育	1.7	1.7	0.6	0.0	0.0	1.7	2.9	2.9
理	1.8	2.7	0.9	0.0	0.0	0.9	0.9	4.5
生活科学	0.0	3.5	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7

いずれもごく少数の経験率であり、他に比べれば利用率が高い「特待生」も、必ずしも経済的な支援を必要として受けたとは限らないものと思われる。平成 23 年度新入生でも、同様の傾向が示されている（お茶の水女子大学 2011b, P42 参照）。

続いて図表 3-2 は、奨学金・学費免除等の制度の認知について、複数回答可として尋ねた結果である。

奨学金制度に関しては、日本学生支援機構による奨学金の認知がもっとも高く、第一種・第二種ともに全体の 6 割を超えている。次いで、「地方公共団体の奨学金」「みがかずば奨学金」がともに 26.4%で続いている。

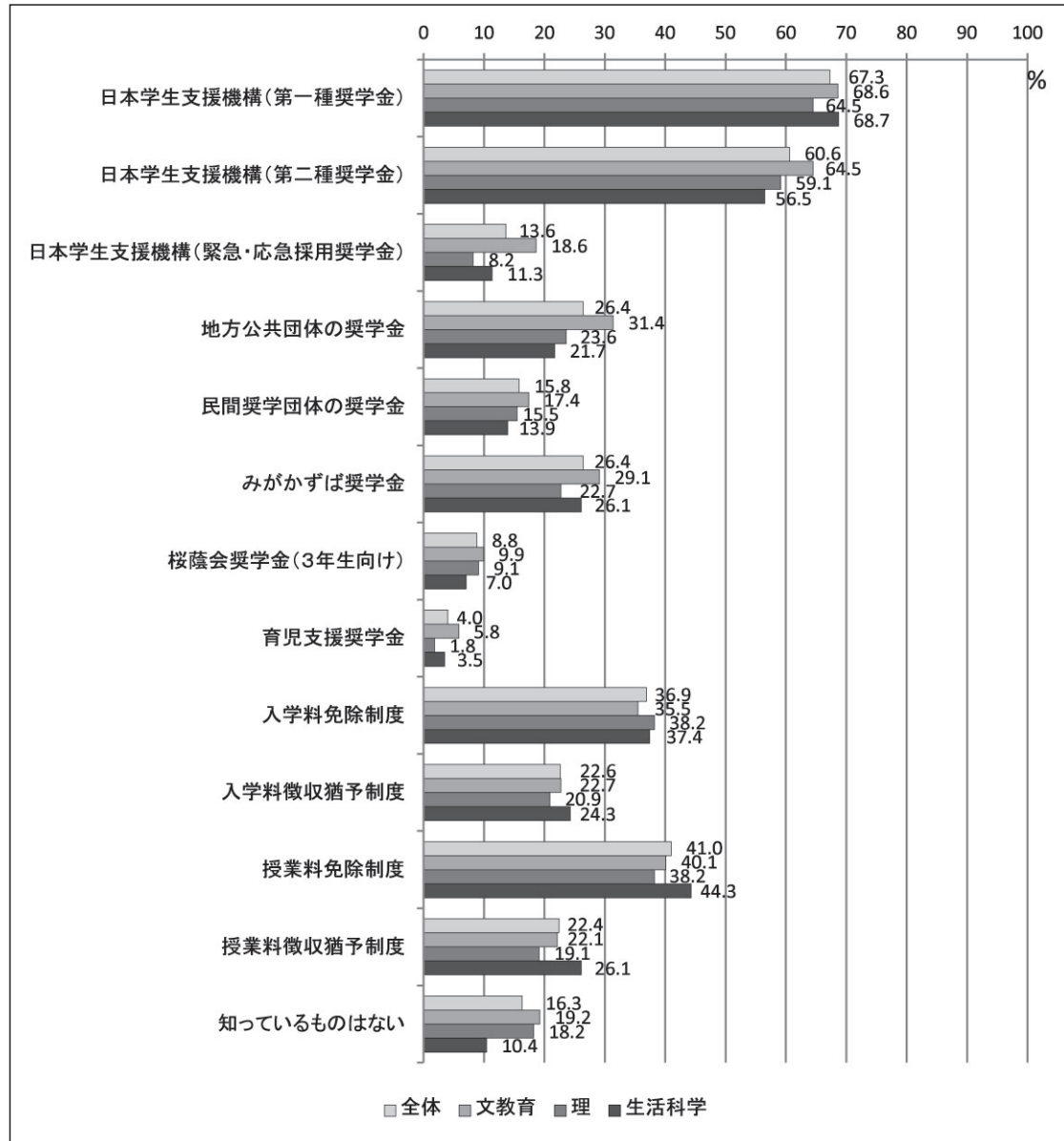
特筆すべきは、本学の独自奨学金である「みがかずば奨学金²」の認知の拡がりである。他の奨学金は平成 23 年度新入生の認知状況と大きな変化はみられないが、「みがかずば奨学金」は全体でみれば 6.0%増加している。

学費免除等の制度に関しては、免除制度に対する認知が全体のおよそ 4 割に及んでいるのに対し、猶予制度に対する認知は 2 割程度であった。平成 23 年度新入生でも、同様の傾向が示されている（お茶の水女子大学 2011b, P42 参照）。

なお、「知っているものはない」との回答は、平成 23 年度新入生より多く、全体の 16.3%であったが（お茶の水女子大学 2011b, P43 参照）、生活科学部では 1 割程度に過ぎないなど学部による差異傾向が示されている。

² 経済的理由で進学をあきらめざるを得ない生徒を支援しようとする取り組みであり、大学受験生を対象に合格決定前に奨学金の内定を出す予約採用給付奨学金制度として、平成 23 年度より国立大学では初めて導入した制度である。「条件を満たした上で合格すると受けられる奨学金（入学前予約型）」であり、給付型（返済不要）としている。
詳細は <http://www.ocha.ac.jp/campuslife/scholarship/migakazuba.html>。

図表 3-2 奨学金・学費免除等の制度に対する認知



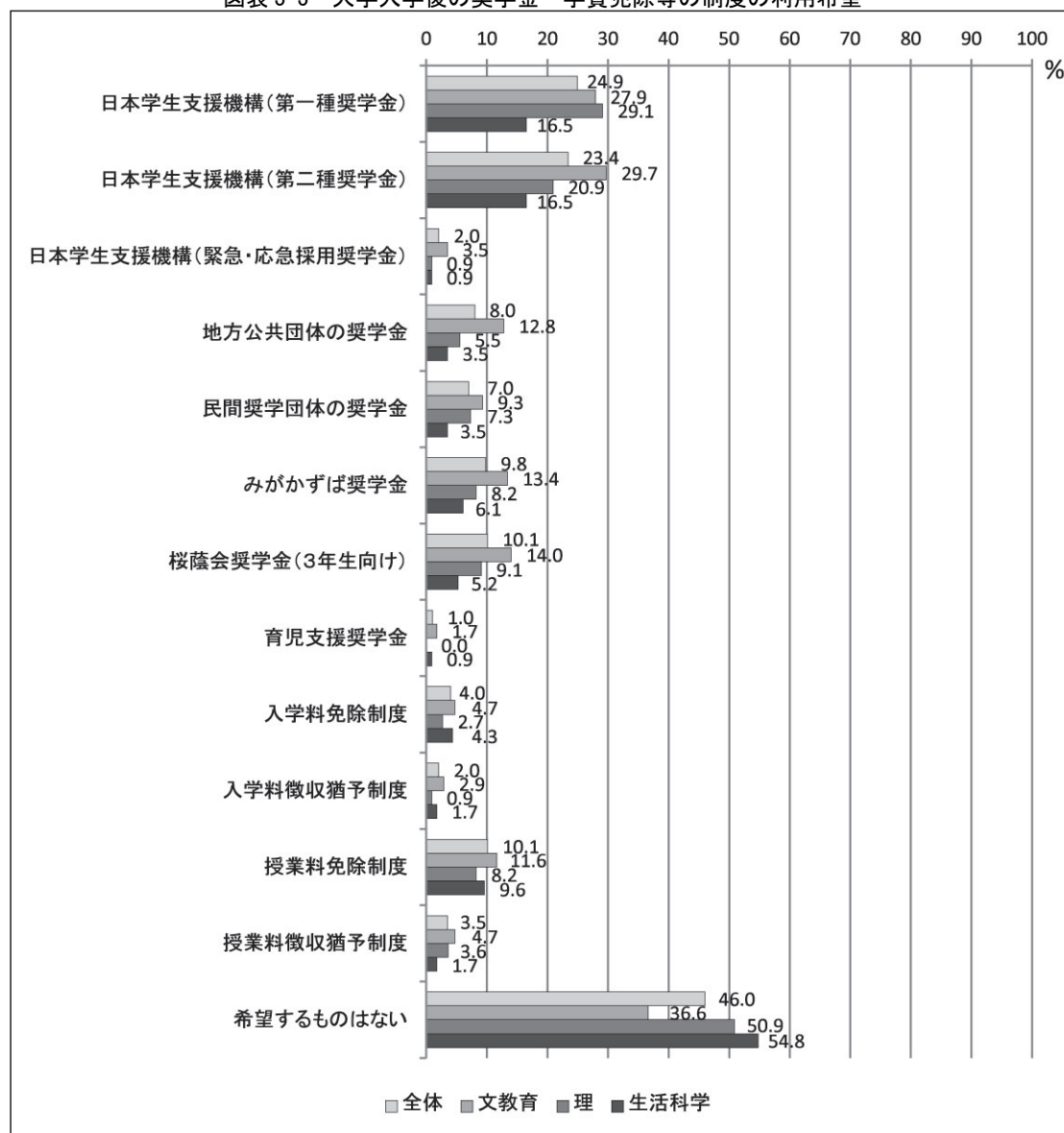
続いて図表 3-3 は、大学入学後の奨学金・学費免除等の制度の利用希望について、複数回答可として尋ねた結果である。

奨学金制度に関しては、日本学生支援機構による奨学金の希望が、第一種・第二種ともに最も高く、全体のおよそ 1/4 でみられる。

学費免除等の制度に関しては、「授業料免除制度」が 1 割を超えているものの、他はごくわずかに過ぎないことが示されている。

その一方で、「希望するものはない」が全体のおよそ半数に及んでおり、平成 23 年度新入生の結果に比べて 1 割以上高い結果となっている(お茶の水女子大学 2011b, P43 参照)。ただし、平成 23 年度同様、文教育学部での低さが示されている。

図表 3-3 大学入学後の奨学金・学費免除等の制度の利用希望



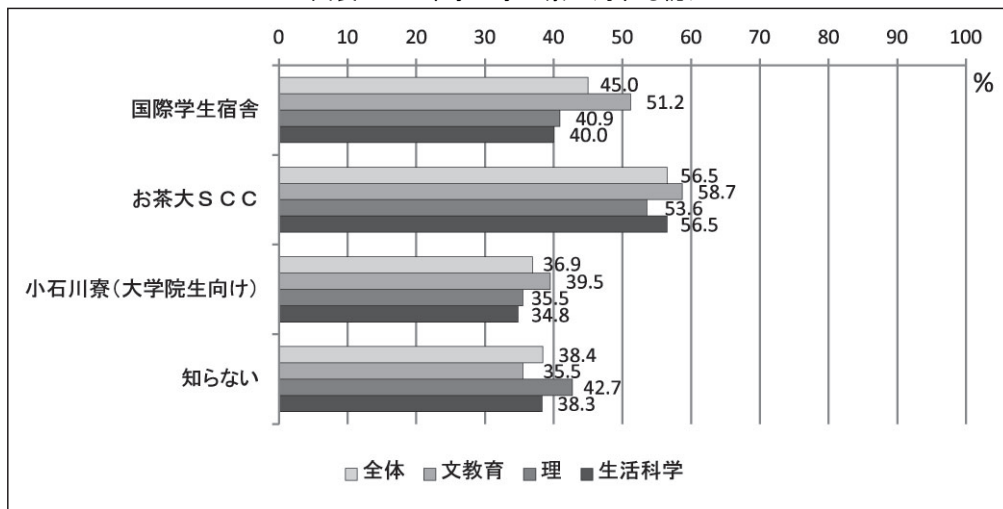
②学生寮に関する「認知」「入寮希望」

図表 3-4 は、本学の学生寮の認知について、複数回答可として尋ねた結果である。

平成 23 年度新入生では、ご子女が入学後すぐに入寮する可能性のある 2 つの寮（「国際学生宿舎」「お茶大 SCC」）に対する認知に差異はみられず、ともにおよそ半数であったが、今年度新入生の結果からは、2 つの寮に対する認知に 1 割以上の差が出ている。今年度新入生自身の結果でもお茶大 SCC の認知が顕著に高まっていることを示したが（P25 図表 5-10 参照）、保護者の回答からみても「お茶大 SCC」に対する認知の高まりがうかがえる。

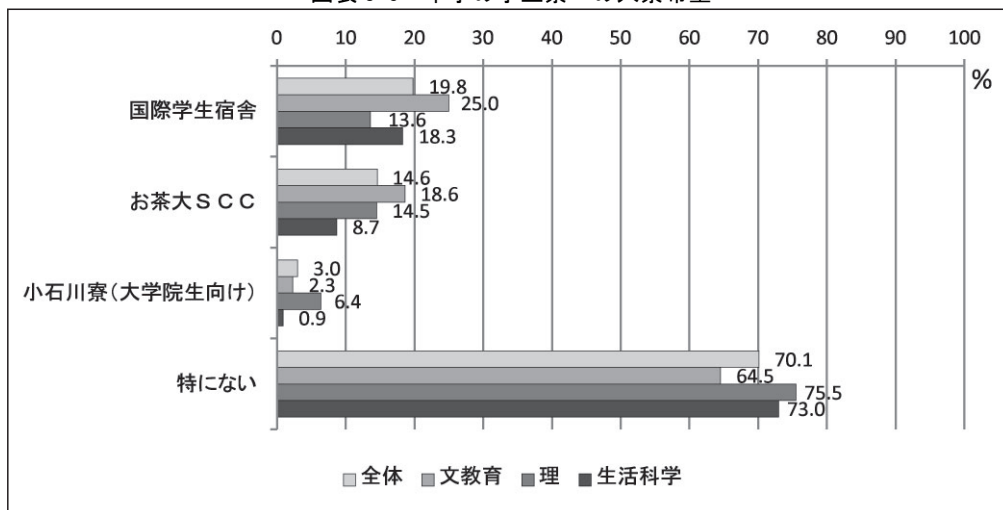
また、学部別にみると、いずれの寮でも、文教育学部での認知が高いことが示されている（平成 23 年度新入生では、生活科学部での認知が高い結果であった（お茶の水女子大学 2011b, P44 参照））。

図表 3-4 本学の学生寮に対する認知



続いて図表 3-5 は、本学の学生寮への入寮の希望について、複数回答可として尋ねた結果である。

図表 3-5 本学の学生寮への入寮希望



「特にない」が全体の 7 割を超えており、平成 23 年度新入生に比べておよそ 5%高い結果となっている（お茶の水女子大学 2011b, P44 参照）。

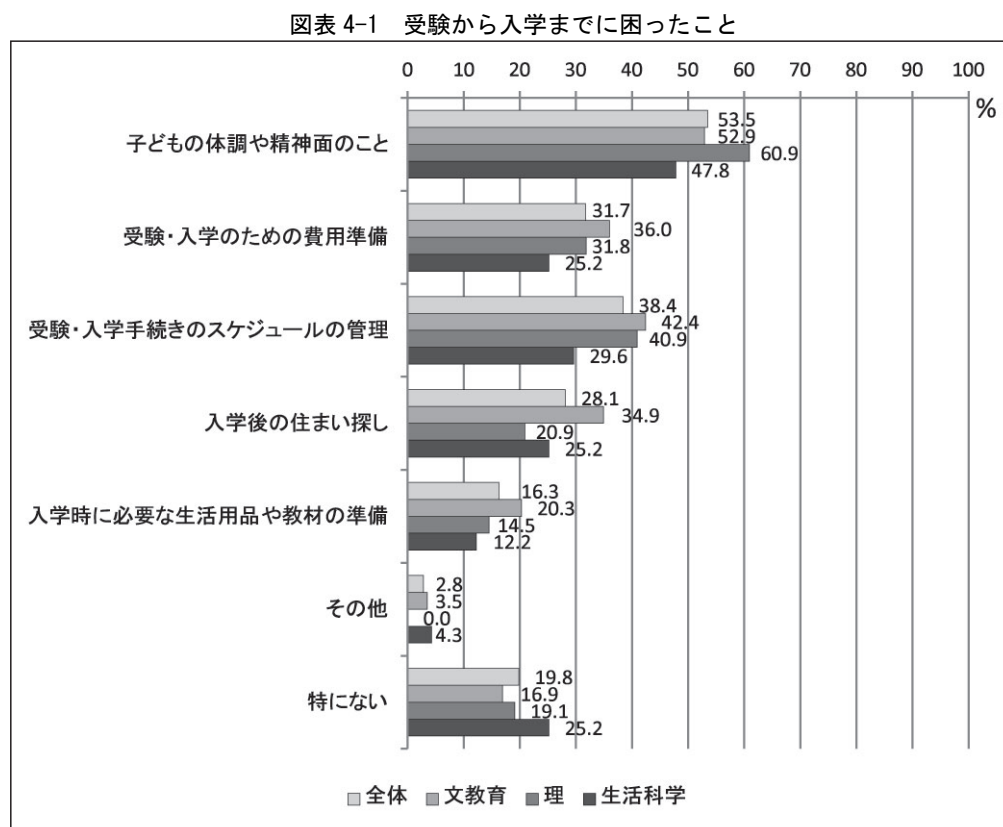
また、ご子女が入学後すぐに入寮する可能性のある 2 つの寮に対しては、いずれも文教育学部での希望が他の学部比べて高く、大学院生向けの「小石川寮」に対しては理学部での希望が他の学部比べて高いことが示されている。

(4) 大学生活の不安・心配事

本節では、ご子女の大学生活の不安・心配事について、①受験から入学までに困ったこと、②大学生活が始まって心配なこと、③本学の学生支援活動で期待するものから示していく。

①受験から入学までに困ったこと

図表 4-1 は、「保護者に聞く新入生調査」を参考に、受験から入学までに困ったことについて、複数回答可として尋ねた結果である。



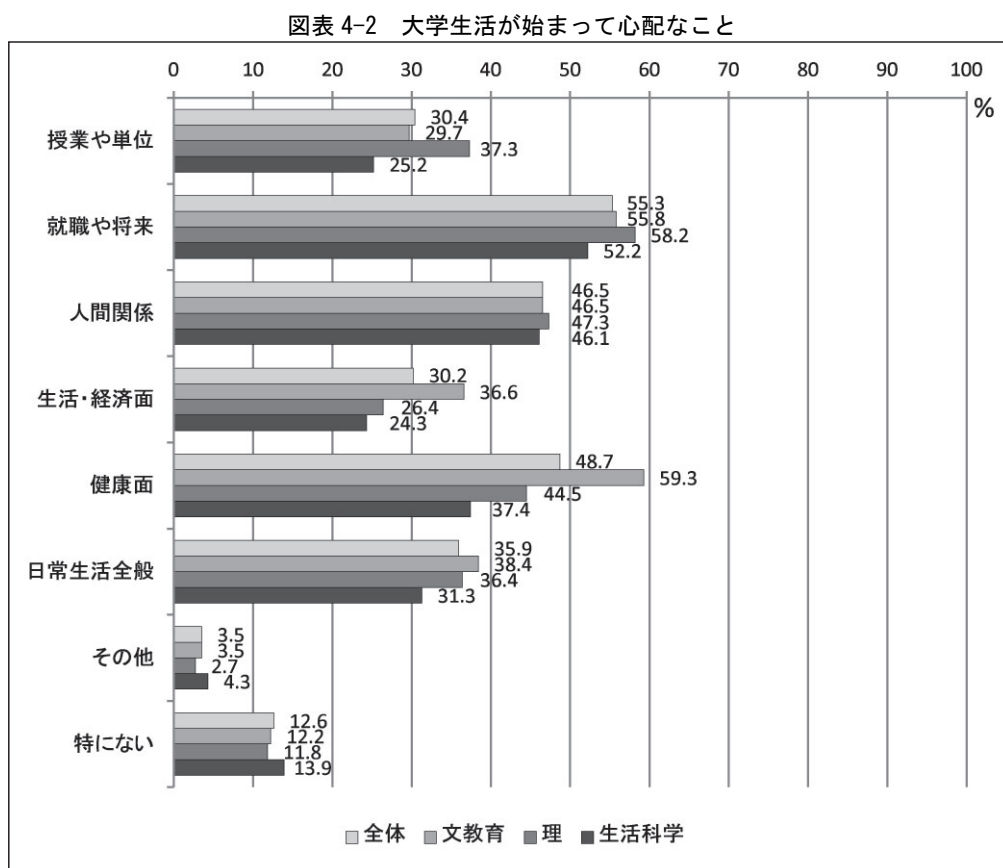
全体でみると、「子どもの体調や精神面のこと」が最も多く半数を超えており、次いで「受験・入学手続きのスケジュールの管理」「受験・入学のための費用準備」の順で多くみられた。この結果は、平成 23 年度新入生でも同様に示されている（お茶の水女子大学 2011b, P45 参照）。

なおこれらの項目に関して学部別にみると、生活科学部がいずれも低い傾向がみられた。生活科学部では、「特にない」が 1/4 を超えており、他の学部に比べても多いことが示されている。

「保護者に聞く新入生調査」によれば、「子どもの体調や精神面のこと」や「受験・入学のための費用準備」などは年々比率が高まっており、2010 年度調査では、「子どもの体調や精神面のこと」53.3%（2 年間で 4.4 ポイント増）や「受験・入学のための費用準備」34.9%（同 3.5 ポイント増）となっている（全国大学生活協同組合連合会 2010, P10）。図表 4-1 からは、これらの点で同様に困った経験をした保護者が、本学新入生の保護者にも少なからずいることがわかる。

②大学生活が始まって心配なこと

図表 4-2 は、「保護者に聞く新入生調査」を参考に、大学生活が始まって心配なことについて、複数回答可として尋ねたものである。



全体でみると、「就職や将来」「健康面」「人間関係」の順で多くみられ、いずれもおよそ半数に及んでいる。この結果は、平成 23 年度新入生でも同様に示されている（お茶の水女子大学 2011b, P46 参照）。

学部別にみると、「健康面」に関しては大きな差異傾向はみられないが、「就職や将来」では生活科学部が低く、「人間関係」では理学部が高いといった傾向もみられる。

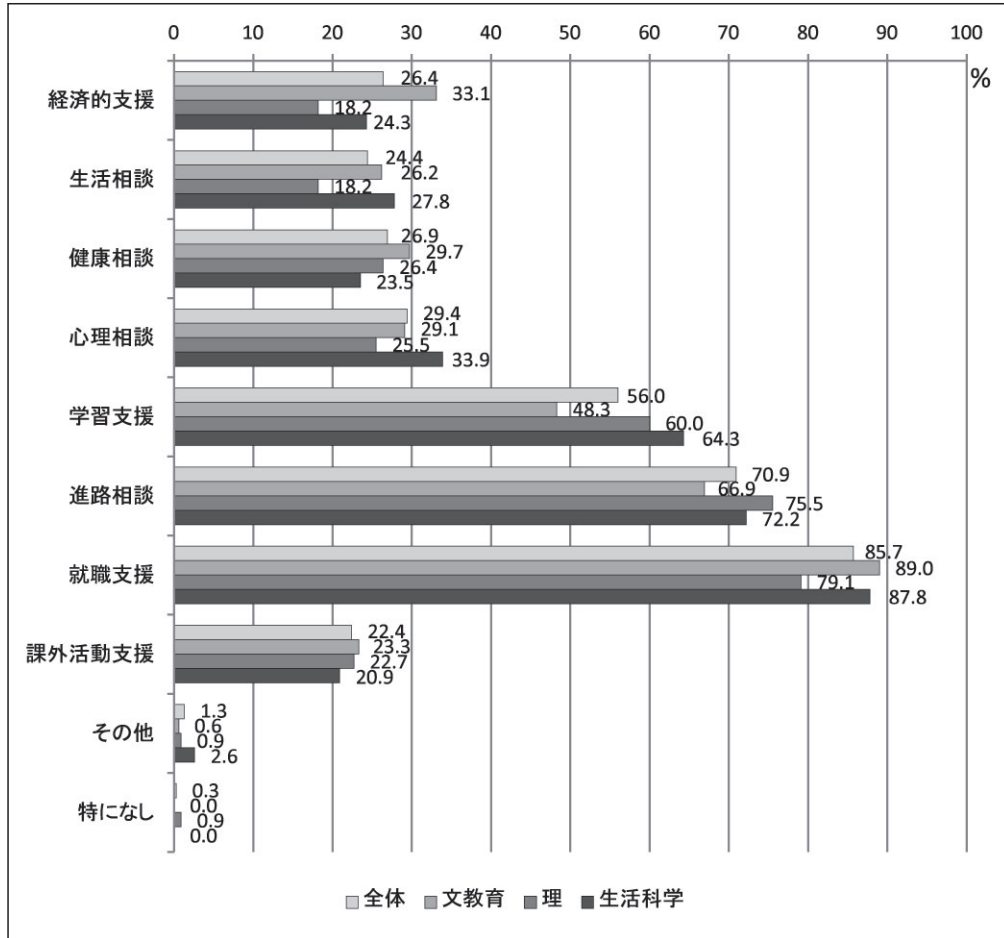
その一方で、「特になし」がいずれの学部でも 1 割を超えており、全体でみると、平成 23 年度新入生より 5% 程度高くなっている（お茶の水女子大学 2011b, P46 参照）。

「保護者に聞く新入生調査」によれば、「就職や将来」や「生活・経済面」は年々比率が高まっており、2010 年度調査では、「就職や将来」44.5%（2 年間で 11.3 ポイント増）、「生活・経済面」26.4%（同 2.3 ポイント増）となっている（全国大学生活協同組合連合会 2010, P10）。図表 4-2 からは、本学新入生の保護者にも、「生活・経済面」もさることながら、「就職や将来」に対する不安が高い保護者が多いことがうかがえる。

③本学の学生支援活動で期待するもの

図表 4-3 は、「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」の調査項目を参考に、本学の学生支援活動に期待するものについて、複数回答可として尋ねたものである。

図表 4-3 本学の学生支援活動で期待するもの



全体でみると、「就職支援」が最も多く、文教育学部や生活科学部ではおよそ9割に達している。次いで、「進路相談」「学習支援」が続いている。この結果は、平成23年度新入生でもほぼ同様に示されている（お茶の水女子大学2011b, P46-47 参照）。

なお、今年度新入生自身に同様に尋ねた結果でも、同様の傾向が示されている（「第1章 新入生調査」図表5-16 参照）。新入生およびその保護者が、本学の学生支援活動に期待するものには大きな隔たりはなく、さらにいえば、これらの支援活動は、本学に在学する学部生が「足りないところ」と感じている学生支援活動でもあることから、より一層の支援活動の充実と、その広報に努めていくことが必要であると思われる。